

ビジョンの安全保障政策

小林 正英

(尚美学園大学総合政策学部准教授)

2016年6月28日火曜日、その数日前に実施された英 EU 離脱国民投票の余波で日程が圧縮された(二日目を27カ国による非公式会合にあてることとなった)注目の欧州理事会で、13年ぶりに改定された EU としての安全保障戦略文書が、フェデリカ・モグリーニ EU 共通外交・安全保障政策 (CFSP) 上級代表兼欧州委員会副委員長によって(結果的に)ひっそりと提出された。

「共有されたビジョン、共通の行動: より強い欧州 - EU の外交・安全保障政策のためのグローバル戦略 (Shared Vision, Common Action: Stronger Europe - A Global Strategy for the European Union's Foreign and Security Policy)」と題された新戦略(以下「グローバル戦略」と略)を一瞥して気づくことは、まず文章量が増えたこと、タイトルが変わったことである。実は、これはあながち表面的なことではない。

2003年にハビエル・ソラーナ CFSP 上級代表兼欧州理事会事務総長の下で作成された、EU としての初めての安全保障戦略文書「よりよい世界における安全な欧州 - 欧州安全保障戦略 (A Secure Europe in a Better World - European Security Strategy)」が15ページほどの文書であったのに対し、今回のグローバル戦略は60ページほどとなっている。他方で、2003年版では「欧州の」戦略と大見得を切っていたものが、今回は「EU の」、しかも外交・安全保障政策の戦略と堅実路線をとっている。

これは、敢えて長々しいのを隠さずに書いた、上級代表の肩書の違いから生じているものと考えられる。すなわち、2009年に発効したリスボン条約により、CFSP 上級代表は欧州委員会の対外関係を担当する副委員長を兼任することとなり、2003年の時点では分立していた EU の対外関係の両面を所掌することとなったことの影響である。単純に、所掌する政策分野、前向きに言えば政策ツールが増えたので、戦略文書の内容も増加したと考えられる。同時に、「EU の」対外政策の総合性・一体性を強みとして打ち出す関係上、「EU の」戦略文書であることを前面に出すタイトルになったものと考えられる。実際に、今回のグローバル戦略策定過程を説明する文書が EU の安全保障政策シンクタンクである EUISS から公表されているが、そのなかでも (EU の) 安全保障戦略文書は対外的な意味合いとともに対内的な意味合いを強く持っていることが指摘されている¹。2003年版ではイラク戦争後の EU 加盟国間の亀裂を埋めることが、そして今回のグローバル戦略では一本化された EU の対外政策ツールの融合を図ることが、「隠しテーマ」であるという。

内容的には、「ビジョン」と「統合型アプローチ (Integrated Approach)」、それに「強靱性 (Resilience)」の語が目をつくところである。「ビジョン」はタイトルと結語に象徴的に使われているが、全体に目を通して残るのが、この文書が安全保障戦略と銘打ちながら、(脅威対応というよりも)「ビジョン」を語っているという印象である。もちろん、脅威を列挙する部分がないわけではないのだが、例えばテロ対策に際しても「EU が対内的・対外的にその価値観に従って行動することこそが、暴力的な過激主義の解毒剤となる」というフレーズが顔を覗かせるのである。そして「ビジョン」の共有こそが、EU のグローバル戦略をかたちづくる凝固剤となると訴える。

¹ Antonio Missiroli ed., *Towards an EU global strategy: Backgrounds, process, references*, EU Institute for Security Studies, 2015.

「統合型アプローチ」は、CFSP のセールス・ポイントともなりつつある民軍融合型オペレーションの概念を更に拡張したもので、紛争の各段階に多面的に関与するとともに、ローカル・ナショナル・リージョナル・グローバルの各レベルで対応するとしている。従来の包括的アプローチを強化する方向性を示したものと見ていいだろう。

最後に、「強靱性」は、例えばアメリカの国家安全保障戦略では、脅威に対抗して国内の「強靱性」を高める、といった文脈で使用されることが多いのだが、今回のグローバル戦略では対外的に使用しているのが特徴的である。すなわち、EU にとっての不安定の弧とも言うべき北アフリカから中東、中央アジアにかけての地域に「強靱性」をもたらすといった具合である。そしてこれら三つのキーワードは、「統合型アプローチ」によって周辺地域に「強靱性」をもたらすという「ビジョン」を語る安全保障戦略、としての今回のグローバル戦略を特徴づけているように読めるのである。

2003 年版安全保障戦略もビジョンを語る文書であった。ただし、EU のビッグバン東方拡大、憲法条約起草、CSDP オペレーションの展開開始といった幸福感の中でのビジョンであった。それでも「効果的な多国間主義」を謳ったビジョンは、しかしながら同時にイラク戦争後の世界で多国間主義を重視する仏独両国と実効性を重視するイギリスの橋渡しという現実的な要請に応えるものだった。今回のグローバル戦略は、ユーロ危機、難民危機、ロシアのクリミア併合、頻発するテロ、さらには英国の EU 離脱表明という「どん底」にあって、それでも語るビジョンである。EU はもはや実験ではなく実践であって現実であるという実体もあるが、他方で、少なくとも安全保障政策においては、国民の安全を最終的に担保する主権国家と、集団防衛によってそれを支える NATO との間にあって、立ち位置を見つけようとしてたゆたう存在であり、その依って立つところがビジョンと民軍融合的な安全保障政策であるように思われる。

ところで、今回のグローバル戦略では「Stronger Europe」という標語が使われているが、英 EU 離脱国民投票の反離脱派の標語も「Stronger in Europe」であったし、米大統領選でのヒラリー・クリントン陣営の標語も「Stronger Together」である。マーケティングのなせる技なのだろうか？